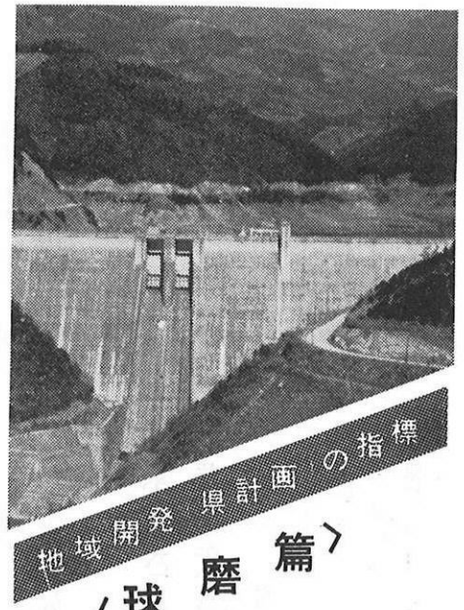


土地改良から観光開発まで

周囲を深く、嶮しい山々に囲まれた人吉盆地。急流球磨川と不良土質の扇状地。球磨開発の歴史はこのような厳しい自然条件とともにあった。そして今や土地改良を母胎として数々の新しい開発の手が……

球磨の地形

球磨地区は、本県の南部を占め、九州山地のやまなみと、そのふところに抱かれた人吉盆地とから成る。

地区の総面積は、一、五三六平方粁、全県の二〇・八%を占めているが、その大部分は、林地である。

森林面積は、国公私有林あわせて一二万五、七〇〇㌶、域内面積の八一・八%に及んでいる。したがって、主な農耕地および市街地・集落は、面積約九二平方粁の人吉盆地に集中している。

人吉盆地は、長さ約二五粁、南西に太い紡錘状の断層角盆地である。北東部の湯前町で標高一九〇㍍、人吉市で標高一〇四㍍、南西にゆるやかに傾斜している。盆地の中央を、標高一、七二二㍍の市房山の北に源を発する球磨川本流が、三二に及ぶ支流を集めて東西に貫流し、槍倒の瀬で大きく北に流れを変え、八代海に注いでいる。

人吉盆地には、古くから、川辺川と小縄川が球磨川に合流する付近を境に、北東部を上球磨地方、人吉市を含む南西部を下球磨地方と呼ぶならわしがあるが、最近は、農業の分野で、盆地中央の免田町を中心とする六町村を、中球磨地区と呼ぶ地域区分が行なわれており、その場合は、多良木・湯前など盆地最奥の町村が、上球磨地区ということになる。また支流川辺川の流域は、川辺郷とも言うべき一地域を形成している。

盆地の一角に立って周囲を眺めると、球磨山地の山稜が、波のように連なり、四方をとりまいている。なかでも、北東方、盆地の奥にひときわ高くそびえているのは、球磨の名山市房山である。

市房山の北には、宮崎県との境に、江代山（一、六〇七㍍）、銚子岳（一、四八九㍍）、国見岳（一、七三九㍍）などの山々が連なり、この高い稜線の西方に、上福根山（一、六四五㍍）、高塚山（一、五〇八㍍）をはじめとして、一、〇〇〇㍍を越す山地が発達し、九州の屋根を形成している。

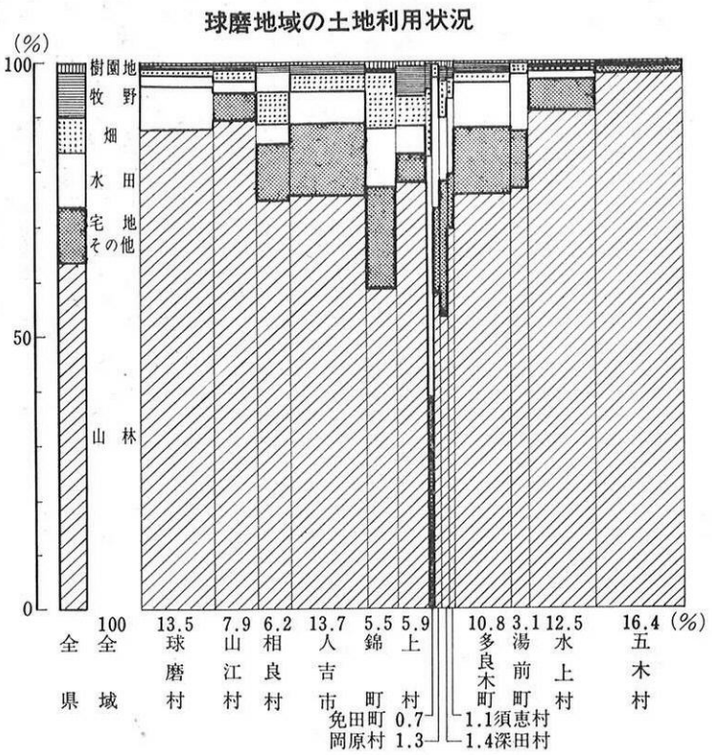
球磨山地は概して東方に高く、市房山、国見岳を結ぶ稜線から、高さ七〇〇～八〇〇㍍の山地が高原状に続き、次第に西に低くなりながら、二〇〇～五〇〇㍍の断層崖をもって、八代平野にのぞんでいる。その中央を川辺川、また球磨川下流などの構谷が、深い谷を刻んで南北に流れている。

川辺川の上流は、白髪山（一、二四四㍍）、国見岳（一、二四一㍍）などいわゆる五木の山中である。また、川辺川が球磨川と合流する付近には、かなり大きな扇状地が形成されており、高原と呼ばれている。

次に盆地の南は、白髪岳（一、四一七㍍）を主峯とする山々によって、宮崎県に接している。白髪岳の北斜面は、急峻な断層崖となって人吉盆地になだれ込み、崖下には神殿原、下原、別府原など大小七つの緩傾斜の扇状地が、幅三粁、長さ二〇粁にわたって発達してる。

この複合扇状地には、十六世紀末（豊臣秀吉の全国統一の頃）からほとんど一世紀以上にわたって百太郎溝および幸野溝の開さくが行なわれ、水田化がすすんでおり、球磨川沿岸の河岸沖積層と合わせて、球磨農業の中心地帯を形成している。

さらに盆地の西部は、芦北の山地によってさえぎられ、球磨川も北に向きを変えて、球磨山地を横切るV字型の狭い峡谷を通り、八代平野に流れ出ている。この構谷は、極めて深く、二〇数粁にわたって、日本三急流の一つとうたわれる溪谷美をかたち作っているが、古来、人吉盆地を外界とへだてる交通の難所にもなってきた。



注）1．総面積は、国勢調査（昭40.10.1）の土地面積に一致させた。
2．田畑樹園地は、「1965年中間農業センサス」の結果によった。
3．牧野は、県畜産課調べの牧野面積（放牧地＋採草地）によった。
4．山林は、県林産課および熊本営林局調べの林野面積によった。
5．宅地その他は、総面積からの差引きによって求めた。

開発のあゆみ

周囲を深く嶮しい球磨山地の山々に囲まれた人吉盆地、急流球磨川と沿岸に発達した不良土質の扇状地。球磨開発の歴史は、このような厳しい自然条件、自然環境との、長く苦しい戦いであったと言ってよい。

球磨地方のような地理的に隔絶された地域における自然との戦いは、一見、国民経済との結び付きも少ない孤立した努力に見える。しかし、その開発の動機を眺めていくと、地理的に隔絶されているため、外部の経済社会との結び付きを強める必要があり、かえって国民経済全体の発展期と密接に関連しながら、開発投資が行なわれてきた事実が認められるのである。

球磨地方における開発の歴史を振り返ってみると、過去において、三つの画期的な時期があったと言える。すなわち、徳川時代の元禄期、明治末期から大正にかけての時期、および戦後である。

元禄時代は、球磨開発の第一期に当たる。この時期に、球磨では、百太郎溝と幸野溝の開さく、および球磨川開きが行なわれた。

元禄時代は、近世初頭の政治的な安定が未曽有の経済的な繁栄をもたらし、元禄文化の花が開いた時代であるが、そうした国民的な経済発展の時期に、球磨のような辺地で、最初の画期的な農業水利事業と交通輸送路の開発が行なわれたことは、球磨開発の歴史を見ていく上で、注目すべき事柄である。

一六九七年といえば元禄十年、五代将軍徳川綱吉の全盛時代である。この年、球磨では無名の農民たちの手によって、百太郎溝の第三期工事が完成したと言われており、溝は多良木町百太郎の取入口から免田川まで通じた。その同じ年に、幸野溝が人吉藩士高橋政重の手によって、藩の事業として着手され、八年後の宝永二年（一七〇五）に、百太郎溝の第四期工事といっしょに完成したのである。

これによって、球磨川南岸の扇状地約二五〇〇㌶の灌漑が可能になり、不毛地の開田が著しく進展して、球磨農業の基